

公害地域の今を伝える スタディツアーの取り組み

2011. 1. 29 環境・公害デー
(財)公害地域再生センター(あおぞら財団)
眞鍋 麻衣子

なぜ、公害を伝えるスタディツアー？

- 2009年から3ヶ年 夏に1地域
- 環境教育の大学教授、学生、NPO職員、
現役教員らと共に現地でヒアリングし、
現地への提案を行う
- 公害の事実は知っている、公害のその後は知
らない。全国の動きを知るために。

→今、どうなっているか、何が学べるか

公害はまだ終わっていない

- かつて公害に苦しんだ地域の今？

住民・行政・企業によるパートナーシップ
未だ病氣と闘っている方々...

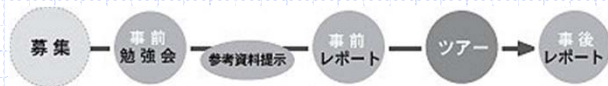
それらは一般的にあまり知られていない

「公害地域の今を伝えるスタディツアー」

- 再生はどこまで進んでいるのか
 - ・ 残された課題は何か
 - ・ 現地で体験を通して確かめる試み
 - ・ ワークショップを通じ参加型で学ぶ
 - ・ 現地で学んだことを発信者として伝える。

ツアー全体の流れ

- 事前の勉強会を行ない、レポートを提出
事前勉強会を受けての、分かったことや疑問を各自まとめる
- ツアー当日
- 事後レポートの提出



スタディツアーの様子

- 新潟(水俣病の地)を訪ねて 2010年夏

スケジュール

	午前	午後	夜
1日目 8/5(木)	バスで移動	現地に到着 新潟水俣病の概要を聞く	グループ分け
2日目 8/6(金)	グループに分かれてヒアリング 現地見学		全体でのヒアリング
3日目 8/7(土)	探鳥会 グループに分かれてヒアリング 現地見学	ヒアリング結果のまとめ提案作業 内部発表会	ヒアリング結果のまとめ 提案作業
4日目 8/8(日)	発表・交流会	解散	
5日目 8/9(月)	昭和電工ヒアリング		



患者さんや支援者、医師に弁護士に行政の方々・・・
色々な立場の方にヒアリング
現場も実際に見て... 班ごとに意見をまとめます



参加者共通の思い

伝えてくれた人達の思いに、
この地に、この事実、自分
達は、何ができるのだろうか



最終日…全体発表会



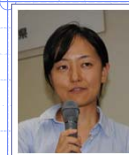
各班の発表



提案内容(一部分)

A班	私たち自身も伝えたい(新聞への投稿など)、そうすることで患者さんにも、伝えることは意味があるんだと背中を押ししたい
B班	立場の違う人達が色々な形で患者さんへの支援を行なっている。今後、患者さんが生きやすいシステムをどう作っていくのが課題として挙げられる
C班	8月8日を私達の「新潟水俣病の日」にし、この日はまわりの人に伝えるなど、出来ることをしたい
D班	新潟水俣病の光と影を考え、伝えていくためには自分には何が出来るのか、各自「宣言」

参加者の感想①(一部抜粋)



(清水 万由子)

今年の新潟への旅は、「学ぶ」ことの意味を考えさせられた旅でした。新潟水俣病資料館の建設の経緯を伺った時、よそ者には見えない感情が渦巻いているような印象を持ちました。

お話を聞いていても、腑に落ちないことがいくつかありました。説明を聞いても、この地域にとって水俣病とはそういうものだったと言われても、そうさせる人間の感情がどんなものなのか、想像を超えているような気がしました。宇井純さんの「自分は、当事者のつもりでやっている」という言葉が心に残っています。時間も空間も隔てた当事者の心を、自分の心として表現することで、自分を動かし、他人を動かす。それが今回気づかされた「学ぶ」ことの意味だったと思います。

参加者の感想②(一部抜粋)

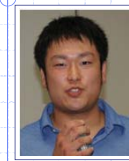


(中林 真理子)

新潟水俣病の原因が鹿瀬工場から排出された水銀が原因であることがわかってから、鹿瀬の人々は、他の地域から責められたり、非難され、次第に他の地域とはかかわらず、現在そこにすむ人々は、深い傷を抱えている。

新潟水俣病公害問題という中には、様々な人が関わっていて、特に、被害を受けた人々の思いや、鹿瀬のように責められ非難され心と人間関係を閉ざしてしまった人々、また、共闘会議やFM事業のように積極的に問題にかかわろうとしている方々、いろんな思いが交錯しているのだなとわかりました。知るということは、その方々の痛みや苦しみを聞き共感することなのかなと感じました。

参加者の感想③(一部抜粋)



(畑中 健志)

新潟水俣病スタディツアーに参加して、他の人にも知ってもらいたいと思うようになった。家族や友達、また、将来の夢である教師になったときに、生徒に伝えられるようにさらに、認識を深めていけたらと思う。また、私からの提案として、こういったツアーをもっと呼びかけ、新潟水俣病への関心をもってもらいたい。

というのも、実際にフィールドに入り、話を聞くことを通して、肌で感じることで学ぶことができるからである。また、新潟水俣病を次世代へと伝えていける人の育成という点にも力を注いで欲しい。そのことは地域への関心を高めることができ、また若い人にも新潟水俣病について考えてほしいからである。

結果・効果 参加者の場合

- 現場を見て聞いて感じて「社会」とつながる
- 話を聞いたことで責任が発生
 - 主体性の獲得(伝える主体として)
- コミュニケーション能力の向上
 - 対話の重要性を自覚
 - (ヒアリング対象者との会話、参加者間での討論)
- これからの生き方を考えるきっかけづくり
 - 「私がこれから何をすべきか」と、
「社会がこれからどうあるべきか」を
つなげて考える・学ぶ

結果・効果 受け入れした立場の場合

- 語るきっかけづくり
 - ツアー前に参加者は勉強会で事実関係を確認
 - 被害者、弁護士、教師、支援者、企業、行政など
 - 様々な立場の人にヒアリングを依頼
 - 「聞く態度がすばらしい」
 - 参加者のことを信頼→話せない話を語る、初めての語り部
- 語る意義を知る
 - 語ったことへの反応(感想、提案)を見せる
- 参加型学習を体験
- 外部の方々へ伝える言葉を獲得

これからの取組

- 大気汚染地域のスタディツアー(大阪)
- ツアーの3年間の報告会と本の出版
- あたらしい公害教育を作る
 - 当事者を増やす、類似の取組を増やす
 - 公害を学ぶ意義を発信する
→悲惨な過去を知るだけではなく
変えていく、発信者へ

■おわり■

ありがとうございました

